卒業論文

「トルコ共和国におけるクルド人の民族運動」

南・西アジア課程　トルコ語専攻

学籍番号　８５０２０９５

佐藤淳也

目次

はじめに……3
第一章　共和国成立期のケマリストの政策……4
　第一節　世俗主義とトルコ人の定義
　第二節　多民族ムスリム国家
第二章　1920 年代、30 年代のクルド人の反乱……8
　第一節　シェイフ・サイードの反乱
　第二節　アララット山の蜂起……11
　第三節　デルスィムの抵抗……12
第三章　PKK……17
　第一節　PKK の闘争
　第二節　オジャランの逮捕……18
おわりに……21
参考文献……22

はじめに

クルド人は、クルディスタンと呼ばれるトルコ、イラク、イランにまたがる地域に暮らす民族である。その人口は２０００万～３０００万と言われ、中東ではアラブ人、ペルシャ人、トルコ人に次ぐ４番目の規模を持つ民族である。一定の領域に居住しながら独自の国家を持たない民族としては、世界最大規模である。

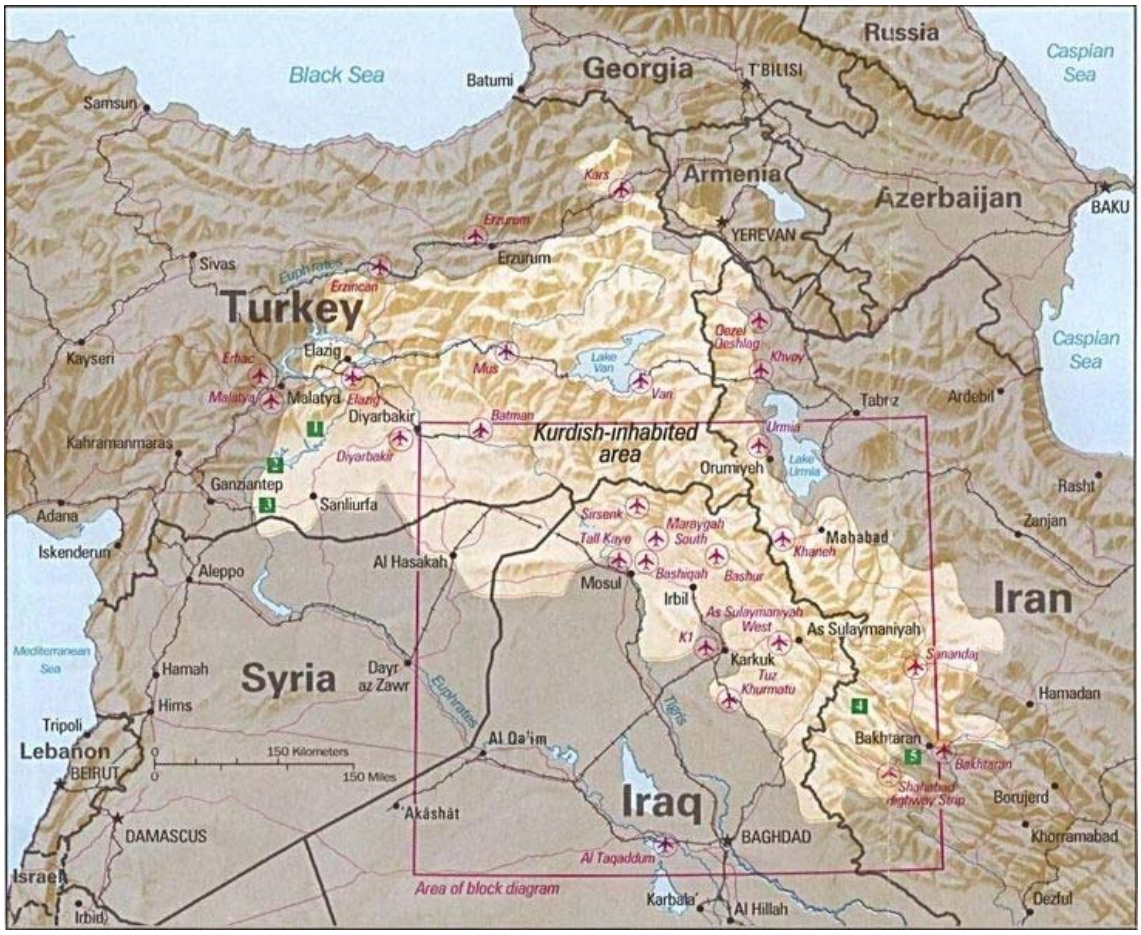
古来よりアナトリア東部からメソポタミア平原北部、ザグロス山脈西部一帯に居住するクルド人は、その地理的事情により、常に周辺諸国の争いの中で生きることを余儀なくされてきた[1]。

１９２０年、セーヴル条約によって一度はクルド人国家の樹立が約束されたが、１９２３年のローザンヌ条約でその約束は反故になった。これによりクルディスタンの分断は決定的なものになった。

クルド人を抱える国は、それぞれ事情は異なるが基本的にクルド人の自決権を認めていない。クルド人は複数の国で少数民族として生活しているが、２０世紀後半になると分離独立を求める勢力も誕生するようになったことから、しばしば迫害を受けてきた。特にトルコには最も多くのクルド人が居住しているが、長きに渡って厳しい同化政策を受け、クルド人と言うものの存在自体を否定されてきた。

この論文では、主に近代トルコにおける政府の政策とクルド人の民族運動を見ていくことで、この問題を探っていきたい。

[1] http://www1.odn.ne.jp/~cbq97680/introduction.htm



クルディスタン[2]

[2] http://en.wikipedia.org/wiki/Image:Kurdish_lands_92_cropped.jpg

第一章　共和国成立期のケマリストの政策

第一節　世俗主義とトルコ人の定義[3]

トルコ共和国が成立し、世俗主義が採用されると、トルコ国民の定義に変化が必要となった。オスマン帝国時代は、イスラームがアナトリア・トルコ人ムスリムを束ねていた。世俗主義を採用したことによりイスラームが国教ではなくなったので、ケマリストは新たなトルコ国民の定義を作る必要があった。ケマリストはまず、トルコに居住していることをトルコ国民の基礎とした。アタテュルクは「トルコに居住している、トルコ国家を構成している人々がトルコ人である」と宣言した。第二に、アタテュルクは共通の過去や信頼が国民の基礎であると強調した。第三の定義は言語である。すべての住民がトルコ語を話せば、住民の国民性は統一されるだろうと思われた。

第二節　多民族ムスリム国家[4]

１９２７年には、まだ国内に非トルコ語話者が多く存在した。人口の 13.58%はトルコ語以外の言語を使っていた。非トルコ語話者は一部の地域に集中しており、特にクルド語話者は東部に集中していた。

一方で宗教においては、トルコはほとんど多様性がなかった。１９２７年、人口の 97.36%はムスリムであった。非ムスリムは数的には少なかったものの、特定の県に集中していた。このことが、政府にとって戦略的に重要なことであった。

１９２０年代、ケマリストは非トルコ系ムスリムを歓迎していた。アンカラ政府は、非トルコ系ムスリムがトルコに同化するのは歴史的必然だと考えていた。非トルコ系アナトリア人ムスリムは独立戦争でトルコに協力するなど、トルコ人との結びつきがあった。トルコ国家はトルコ人とその他のアナトリア人ムスリムのコミュニティであると考えていたズィヤ・ギョカルプは、後者も皆トルコ人になるだろうと主張していた。そのためには、彼らをトルコ文化に同化させ、トルコ語を習得させる必要があった。そのため１９２０年代、アンカラ政府はアナトリア人ムスリムのトルコへの同化を容易にするため、トルコ語のみの教育システムや、民族的主張の禁止を含む政策を実施した。

3　以下の記述は、Soner Cagaptay, *Islam, Secularism, and Nationalism in Modern Turkey: Who is a Turk?*, Routledge, 2006, p. 14, を参照した。

4　*ibid.*, p. 16, を参照。

実際、同化政策はすでに、特にムスリム移民に影響を及ぼし始めていた。彼らはすでに自分たちの文化的、社会的構造を捨てていたので、トルコへの同化が容易になっていた。トルコ語話者ムスリムの中で生活していたことで、彼らは同化する可能性の高い存在となっていた。彼らは次第にトルコ社会に溶け込んでいき、１９２０年代には彼らのほとんどは母語を話さなくなっていた。

ケマリストたちは、原住のアナトリア系ムスリムであるクルド人やアラブ人、ラズ人、グルジア人などもトルコ人と歴史を共有しているため、移民たちと同じようにすぐに同化されるであろうと考えていた。彼らもオスマン帝国の出自である。１９２０年に議会で行われたスピーチで、アタテュルクは次のように語っている：

「議会のメンバーはトルコ人だけでも、チェルケス人だけでも、クルド人だけでも、ラズ人だけでもない。イスラームという要素が皆をまとめているのである」[5]

クルド人の血を引いているズィヤ・ギョカルプもクルド人の同化を推進していた。しかし、原住のムスリムは移民たちのように同化される理由を持っていなかった。彼らは故郷から追放されたわけでもなく、自身の文化的、社会的構造をなくしたわけでもなかった。その中でもクルド人は特別な存在だった。彼らは、最もトルコに同化することが難しい非トルコ系の集団だった。

他のムスリム諸民族と比べて、クルド人は同化に対して妥協しなかった。その理由としては､第一にクルド語話者の数がトルコの非トルコ語話者の中で最も多かったことである。クルド人の次に多かったアラブ人とチェルケス人ですら人口の１％以下だったのに対し、クルド人は人口の１割近くを占めていた。

第二に、他のムスリム諸民族は国の各地に散らばっていたのに対し、クルド人はトルコ南東部の広い範囲でマジョリティだったことである。１９２７年の人口調査によれば、彼らはヴァン、ムシュ、シイルト、ディヤルバクル、マルディン、アララット、エラズーの７県において多数派だった。例えばヴァンでは、人口の 79.1%をクルド人が占めていた[6]。さらに、東部のウルファ、マラティヤ、エルズィンジャン、カルス、マラシュ、エルズル

---

[5] Soner Cagaptay, *op. cit.*, p.19.
[6] *ibid.*, p19 を参照

ム、スィヴァスの７県のマイノリティの中で最も大きな存在だった[7]。

第三に、トルコの他のムスリム諸民族と比べ、クルド人は自分たちがオスマン帝国においてトルコ系ムスリムのエトニ[8]ではないと考えていたからである。オスマン帝国時代、クルド人はオスマン帝国の端にある山岳地帯に住んでいた。彼らは昔からこの地域に住んでいたが、オスマン帝国やトルコ系ムスリムのエトニには従っていなかった。しかし、１９世紀にスルタン・アブデュルハミド２世は、タンズィマートによる改革で彼らをオスマン帝国に属するものとした。クルド人は、それまで自分たちがオスマン帝国に属するとは考えていなかったが、このときトルコへの同化政策に直面した。トルコのムスリム諸民族の中で、クルド人は最も同化に対して抵抗した。

しかしケマリストはクルド人を他のムスリム諸民族と同じように考えていた。クルド人は独自の民族的アイデンティティを持たず、同化されるであろうと考えていた。ケマリストは言語をその根拠としていた。彼らは、クルド語は１つの独立した言語では無いと考えていた。山岳地帯に暮らしていたことにより発生した、トルコ語の方言の１つとしていたのである[9]。

7　Soner Cagaptay, *op. cit.*, p19.

8　「エトニ」とは共通の祖先、神話、歴史的記憶、文化、歴史的空間領域、及び民族的連帯感を有する近代的なネイションに先立つ民族・宗教的共同体である。 *ibid.*, p4.

9　*ibid.*,

第二章　１９２０年代、３０年代のクルド人の反乱

クルド人は共和国の同化政策に対して数々の反乱を起こしてきた。ここではその中でも特に重要な反乱を見ていく。

第一節　シェイフ・サイードの反乱

１９２０年代の反乱の中で、最も大規模な反乱が「シェイフ・サイードの反乱」である。１９２５年２月、クルド・ナショナリストであり、ナクシュバンディー教団の長老でもあったシェイフ・サイードがディヤルバクルとエラズーで蜂起した[10]。彼らは地域で大きな支持を得て、ダニヒル（現在のゲンチ）をクルディスタンの臨時首都とし、ムシュ、リジェ、ディヤルバクル、ビンギョル、エラズーなどを支配下に置いた[11]。

内閣総理大臣フェトヒ率いる政府は、この暴動を止めることができなかった。１９２５年３月２日に内閣は解散し、３月４日にイスメット・イノニュが政権を握った。イノニュは”Takrir-i Sükun Kanunu”（秩序維持のための法）を制定し、これにより政府の軍事力を拡張した[12]。

イノニュ政権はその強大な力で、まずいくつもの批判的な新聞の発行を禁止した。次に、反対勢力である進歩共和党に対して行動を始めた。１９２４年１１月１７日に設立された進歩共和党は、トルコ人の反対勢力が集まる場となっていた。この政党には、独立戦争時代にはアタテュルクに協力していながら、彼のリーダーシップに疑問を抱くようになった者や、世俗主義に危険を感じていた者たちも参加していた。この政党のメンバーには、アリ・フアット・パシャ、ジャフェル・タイヤル・パシャ、ラウフ・ベイ、レフェット・パシャ、キャーズム・パシャなどの優れた軍の司令官が含まれていた。また、アドナン・ベイ、メフメット・ラフミ・ベイ、イスマイル・ジャンブラットなどの有名な政治家や学者たちも加わっていた[13]。

イノニュは進歩共和党を排除しようと考え、そのために「独立法廷」を使った。この法廷は秩序維持のための法によって作られたものであり、特別な力を持っていた。この法廷が進歩共和党の多くのメンバーを裁き、これによってこの政党は１９２５年６月３日に解

10　中川喜与志『クルド人とクルディスタン』（南方新社、２００１年）、２０６－２０７頁。
11　同上、２０７頁。
12　Soner Cagaptay, *op. cit.*, p.21.
13　*ibid.*,

散した[14]。これにより、ケマリズムの政治的対抗勢力はほぼなくなった。

同時期に、イノニュはシェイフ・サイードの反乱にも対処した。イノニュは大量の兵を派遣し、１９２５年４月には反乱を鎮圧した[15]。シェイフ・サイードを初めとする指導者たちは４月１５日に逮捕され、ディヤルバクルに設けられた「独立法廷」で死刑判決を下され、即座に処刑された[16]。政府は、蜂起者たちの家族をトルコ西部に強制移転させるなどの厳しい政策を取った[17]。また１９２６年９月、アンカラ政府はユーフラテス東部の地域に外国人が入ることを禁止した[18]。それにより、南東部での掃討作戦を外国の視察者に見られることを防いだ。

この頃、反乱の多さはまだ政府の悩みの種だった。多くのクルド人が武器を取って立ち上がる可能性があった。そのため、南東部の反乱を鎮圧した後、政府はクルド人問題に取り組む姿勢を変えた。外務大臣シュクリュ・カヤは次のように語っている。

「アンカラ政府はすでに気付いていた。この山岳地帯の強靭な民族の問題を解決するためにその指導者を倒したり、村を焼き払ったり、牧草地帯に通じる道を閉ざしたりしても意味が無いということに。」[19]

そのため、政府は新しい政策で動き始めた。“Şark Islahat Rapor”（東部改革のための報告書）という内務大臣ジェミル、法務大臣マフムット・エサット・ボズクルト、TBMM議長ムスタファ・アブデュルハーリッキ、将校キャーズムによって書かれた報告書が、東トルコの主な問題について触れている[20]。

この報告書は初めに、マラティヤを含むユーフラテス川から東の県のクルド人の重要性に言及している。これらのトルコ人とクルド人が混ざった地域を、徐々に同化していく必要があった。アンカラ政府はトルコ人がクルド文化に溶け込むのを防がなければならず、またすでにクルドに溶け込んだ者たちを再び同化しなければならなかった。報告書はその

---

14 Soner Cagaptay, *op. cit.*, p.22.
15 *ibid.*,
16 中川喜与志（前掲）、　２０７頁。
17 Soner Cagaptay, *op. cit*, p.22.
18 *ibid.*,
19 *ibid.*,
20 *ibid.*,

ために五段階の戦略を挙げている[21]。第一に、トルコ人とクルド人が混在している地域のクルド語出版の禁止。第二に、危険な姿勢をとっているものを西トルコに追放すること。第三に、より良い支配を保つため、政府は東部に新しい線路や街道、ジャンダルマの駐留所を作る必要があるということ。第四に、東部を統治するため視察団（Umumi Müfettişlik）を置くこと。最後に、政策が完遂するまで東部を軍の支配下に置くことである。

アンカラ政府はこれらを実行するため、東部に特別な法を作った。１９２７年６月２５日、TBMMは視察団を作るための法律を制定した。最初の視察団は１９２８年１月１日に作られ、地域を統治するための権力を持たされた。この政策はディヤルバクル、エラズー、ウルファ、ビトリス、ヴァン、ハッキャーリ、シイルト、マルディンをカバーしていた[22]。これにより、クルド人が多数派でシェイフ・サイードの反乱が起きたディヤルバクルを、視察団が管理した。

この時期、この地域はシェイフ・サイードの反乱で受けたダメージから立ち直っていなかった。そのため、最初の監察官であるイブラヒム・タリ・オンギョレンは、問題解決のため道路の建設、教育や農地改革などの政策を行った[23]。これらの政策は軍事支配の緩和もともなっていた。１９２７年１２月５日、TBMMは新たな法を作った。これにより、シェイフ・サイードの反乱の後の、クルド人の東部からの追放をなくした[24]。また一方で、トルコ南東部の交通網は大幅に改善された。例えば、以前は行くことが難しかったデルスィムを通る、エラズーからエルズィンジャンへの新しい街道が作られた[25]。東へ道を拡張することによって、クルド人はより支配下に置かれ、またトルコ人の役人は、より正しくクルディスタンの問題を理解するようになるだろうと予想された。

またオンギョレンは、クルド・ナショナリズムの発達を防ぐため、農地改革や教育、軍務を行った[26]。大きな私有地を分散させることで、部族の指導者による反乱を制限した。教育などの政策も、紛争除去のための手段であった。また、軍も同化政策において重要な場だった。「西アナトリアに派遣されるクルド兵」は「トルコ語の読み書きを教えられた」者だった[27]。そのため、これらの人々は「良いトルコ人」となっていった。

---

21 Soner Cagaptay, *op. cit.*, p.22
22 *ibid.*, p.23.
23 *ibid.*,
24 *ibid.*,
25 *ibid.,*
26 *ibid.*,
27 Soner Cagaptay, *op. cit.,* p.23.

１９２８年には、この視察団の飴と鞭の政策は、東部の治安状況を改善していった。１９２８年夏、政府は東部への姿勢を緩和していった。１９２６年に西部に強制移転されられたクルド人たちは、故郷に戻ることが許可された[28]。また、１９２５年から施行されていた軍事法は解かれ、姿勢を改めた反逆者たちには大赦が与えられた。１９２０年代の終わりごろにアララット山で蜂起が起こるが、視察団の成功により、この地域はその蜂起を鎮圧してくれるだろうという希望を持って視察団に従属した。アンカラ政府は、視察団がクルド人の反抗勢力を制圧し、トルコに帰属させることを期待していた。

第二節　アララット山の蜂起

１９２９年、トルコ政府はアララット山地域のクルド人とアルメニア人の蜂起の準備に目を向けるようになった。クルド人とアルメニア人は、協力してケマリストに立ち上がろうとしていた。JUK（ジャンダルマ参謀幕僚）のレポートによれば、シリアやイランの国境付近で大規模な蜂起を起こすため、アルメニア人が武装し、クルド人に支援を行っていた[29]。ホイブーンというクルド人及びアルメニア人ナショナリスト組織が、マルディン県への襲撃の準備を行っていた[30]。このクルド人とアルメニア人の連合が、１９３０年にアララット山で大規模な蜂起を起こした。

蜂起軍はアララット山からヴァン、ビトリス一帯を制圧し、そこにはクルディスタンの国旗が翻った。これに対し、アンカラ政府は１９３０年６月に一斉攻撃を開始した。アンカラ政府は戦闘機を使い、またアララット山に１万５千もの兵を投入した。しかし、約１ヶ月の戦闘で１７００名のトルコ兵が捕虜になり、１２機の戦闘機が撃墜される事態となった[31]。そこでアンカラ政府はテヘラン政府からトルコ軍のイラン領通過の許可を得て、解放区を背後から攻撃した。蜂起軍は包囲され、３０年夏には壊滅させられた。この時期、反乱の鎮圧期間中のいかなる行為も罪を問わないとする法律も制定された。この法律の制定が、この反乱の激しさを物語っている。また、アンカラ政府がクルド人を「山岳トルコ人」と呼ぶようになったのはこの時期であるとされている[32]。

28　*ibid.*, p.24
29　*ibid.*, p.38.
30　*ibid.*,
31　中川喜与志（前掲）、２０９頁。
32　中川喜与志（前掲）、２１０頁。

第三節　デルスィムの抵抗

１９３０年代、クルド・ナショナリストのリーダーであったベディルハンは、クルド人はケマリストの同化政策に対して徹底抗戦する意思を持っていたと指摘していた。それでも、アンカラ政府は１９３０年代も同化政策を続けた。

ケマリストは、クルド人は独立した民族ではないと考えていた。例えば、トルコ人参謀幕僚ヌリ・ベイ大佐は「クルド人は色々な種族が混ざり合った民族であり、起源も不明で国家としての統一性をもっていない。クルド人、トルクメン人、チェルケス人、アルメニア人の種族的違いは不明である」と語っている[33]。またヌリ・ベイは、「クルド語はエルジス山などで話されているトルコ語の方言と強い類似性を持っている」と言い、それゆえクルド人は「セルジュークトルコ人に大きく由来している」と付け加えた[34]。アンカラ政府はクルド人が独立した民族ではないと考えつつも、クルド・ナショナリストの出版物が国に持ち込まれることを禁止した[35]。例えば、１９３４年８月１日、ホイブーンが出版した４冊の本が発禁になった。また、「クルディスタン」という単語を含む出版物も禁止された[36]。

この時期、１９３０年代前半、東トルコの状況は比較的静まっていた。しかし、ユーフラテス川東部が静まり返っているのは事実だが、その静寂が軍事力に依存するものであることも疑いない事実だった。この状況は監察官オンギョレンによるものだった[37]。彼の政策は圧迫や暴力を含むものだったが、東部の状況を改善していた。

１９３０年代、ユーフラテス川東部でアンカラ政府の支配下に入っていなかった地域は２つだけだった[38]。その２つはデルスィムとサソンである。アンカラ政府はサソン峡谷を「禁じられた地帯」として、入ることを禁止した。

デルスィムは６０００ｋ㎡以上の面積があり、サソンよりも大きかった。１９３０年代のデルスィムの人口は６万５千～７万人だった[39]。この地域のマジョリティは、クルド人の中でもマイノリティであるザザ語を話すアレヴィー派のクルド人だった[40]。このことから、政府はデルスィム人を他のクルド人とは分けて考えていた。アレヴィー派であるデル

33　Soner Cagaptay, *op.cit*, pp.107-108.
34　*ibid.*, p.108.
35　*ibid.*,
36　*ibid.*,
37　*ibid.*,
38　*ibid.*, p.109.
39　Soner Cagaptay, op, cit., p.109.
40　*ibid.*,

スィム人は、確かにマジョリティであるスンニー派クルド人とは違っていた。歴史的にスンニー派ムスリムはアレヴィー派を異端とみなしており、またマジョリティである保守的なスンニー派クルド人はアレヴィー派を見下していたので、デルスィム人はスンニー派クルド人のコミュニティには加わらなかった[41]。シェイフ・サイードの反乱の時の彼らの行動がそれを示している。そのとき、ムシュ、ディヤルバクル、エラズーのスンニー派クルド人たちは反乱軍側についていたが､デルスィムのアレヴィー派クルド人は中立を保つか、またはトルコ側の味方についてシェイフ・サイードと戦った[42]。

ケマリストによる世俗主義は、デルスィム人やその他のアレヴィー派を平等に扱うものであった。また、世俗主義はアレヴィー派をオスマン帝国時代に長きに渡って続いていた迫害から解放するものだった。ケマリストの世俗主義から大いに恩恵を受けていたデルスィム人やその他のアレヴィー派は、共和国に従うであろうと考えられていた[43]。

デルスィム人は、クルド人のマジョリティであるクルマンジー語話者には分かりにくいマイノリティのザザ語を話していた。そのため、ケマリストはデルスィム人が他のクルド人とは民族的に違うものだと信じていた。デルスィムの住人は真のクルド人ではなく、クルドに同化してしまったトルコ人として扱っていた。１９３６年に書かれた、トゥンジェリ（デルスィム）県の監察官でありトゥンジェリの総司令官でもあったアルプドアン将軍の報告書も、そのように主張している。「科学的根拠と彼自身の見聞」に基づいて、アルプドアンはデルスィムの住人がトルコ民族であると主張した[44]。そのような見方は１９２０年代には一般的なものだった。TBMMの議員によって書かれた報告書でも、デルスィム人はトルコ人であるが、彼らはアレヴィーであることから自分たちがクルド人であったと考えていたと主張している[45]。トルコ独立運動の指導者の一人であったキャーズム・カラベキルも、デルスィム人はトルコ民族起源であると主張していた。このように、アンカラ政府によれば、デルスィムのアレヴィー派ザザ語話者はスンニー派クルマンジー語話者と比べて、自分がクルド人であるという主張が弱かった[46]。

それでも、１９３０年代まで、デルスィムは模範的なトルコの属領ではなかった。その独特な民族宗教的なアイデンティティに加え、伝統的な自治性と部族的な文化で、ならず

---

41 *ibid.*,
42 *ibid.*,
43 *ibid.,*
44 *ibid.*,
45 *ibid.*,
46 Soner Cagaptay, *op, cit.*, p.110

者のように扱われた。彼らは、国の中にいながら法の外にいた。

１９３５年１２月２５日、TBMMは”Tunceli Kanunu”（トゥンジェリ法）を制定した[47]。１９３６年１月に出された指令で、第四の視察団が置かれた。トゥンジェリ、エラズー、ビンギョル、エルズィンジャンがこの視察団の監視下に入った。

最初の視察団の目覚しい成功が、政府にトゥンジェリの視察団を作ることを決意させた。しかし、この二つの視察団の重要な違いは、最初の視察団が文民組織だったのに対し、トゥンジェリの視察団は軍の機構だったことである[48]。トゥンジェリは、部族的で進歩の遅い地域だったので、シュクリュ・カヤは「トゥンジェリ県の再編成」が必要だと主張した。この遅れが、「デルスィム住人を扱った過去の試みが失敗している」ことを示している。そして、共和国はこの地域に喜ばれるような文民組織を作ることを決めた。[49]。

トゥンジェリ視察団の権限は、デルスィム周辺の県をカバーしていた。これはその地域を取り囲むための試みだった。

トゥンジェリ視察団は、この地域に新しい街道、橋、ジャンダルマ駐留所を作ることに焦点を置いた[50]。この地域でのアンカラ政府の力が強くなっているように感じられていた。いずれは政府がデルスィムの領主や独立した部族を倒してしまうのではないかと思われるようになった。そして間も無く、１９３７年春にデルスィムは反乱を起こした。クルド人蜂起者の一団が一つの橋を破壊し、役人のグループを潰した。次に、部族の連合は政府に「デルスィムに軍隊やジャンダルマの支部が作られてはならない、橋が作られてはならない、管理組織が作られてはならない」と言う最後通牒を出した[51]。また、銃器を保持し続けることを許可するよう要求した。

アンカラ政府は、反乱を止めるため全力で行動した。四つの師団に分けた２万５千の兵士、騎兵団、そしてジャンダルマの一団が展開された[52]。これらの軍は２０機の戦闘機を持っていたが、それでも政府は苦境に立たされた。山に囲まれた地形が、兵士たちが優位に立つのを難しくしていた。また、交通手段と意思伝達の不足が、トルコ軍の戦略を無力化していた。これらの要素が１９３７年夏の間、ゲリラ戦を展開していたクルド人を優位

---

47 *ibid.,*
48 *ibid.*, p.111.
49 *ibid.*,
50 *ibid.*,
51 *ibid.*,
52 Soner Cagaptay, *op. cit.,* p.111.

に立たせていた[53]。

この頃、反乱のリーダーであるセイド・ルザは、国際援助を求めた。６月３０日に、彼はイギリスの外務大臣に手紙を出した[54]。ルザはトルコ政府の残虐さを強調し、毒ガス兵器の使用、一般市民や村に対する爆撃などにも言及した。しかし、彼の努力は何の援助ももたらさなかった。それでもクルド人は本拠地を維持し、トルコ軍にダメージを与え続けていた。アルプドアン将軍も「トルコ軍の犠牲者はクルド側の犠牲者よりも多い」と認めていた[55]。

政府はこの状況に対して慎重になっていた。加えて、視察団は「アルメニア人らしき者たちが南からトゥンジェリに入ってきている」と言う情報を持っていた[56]。アンカラ政府は、この反乱がシリアのアルメニア人と結びついているのではないかと警戒した。また政府は早い段階で、ある程度のアルメニア人がトゥンジェリのそこかしこに存在していると確信していた[57]。この疑惑が政府にアルメニア人の共謀と言う恐怖を与え、１９３７年９月にトルコ軍が反乱者の中から何人かのアルメニア人を捕らえたことで、その恐怖はさらに悪化した。

１９３７年末には、アンカラ政府は戦略を変えた。冬が近づくと、政府はそれ以上地域に突入するのをやめることを決めた。ゆっくりとだが確実な掃討作戦を開始した。軍は反乱勢力を戦略的に止めるため、地域を包囲した。この１９３７年冬の包囲が、反乱軍の供給ラインを止め、戦力を大幅に下げた。１９３８年夏、軍はトゥンジェリに進軍した。イギリスの外交官は、軍は無差別攻撃を仕掛け多くの一般市民が犠牲になったと指摘した[58]。両軍共に多くの血を流した後、１９３８年１０月、アタテュルクが死ぬ前月、ついにトルコ軍は反乱を終わらせた[59]。

アタテュルク下のケマリズムが終わると、トルコ国内でのクルド人の反乱は終了した。１９３８年１０月にトゥンジェリが従属した後、東トルコは長きに渡る静寂に入った。ドイツ人考古学者ハンス・ヘニング・フォン・デア・オステンは１９３８年にこの地を訪れ、１９８０年代まで続くこの平和の背景を次のように説明した。:

---

53 *ibid.,*
54 *ibid.*,
55 *ibid.,* p.112.
56 *ibid.*,
57 *ibid.,*
58 *ibid.*,
59 Soner Cagaptay, *op. cit.*, p.112

「クルド人は遊牧民的なライフスタイルを捨て、村に定住するようになった。自分たちがトルコ国民であると考えるようになり、しばしばトルコ人と結婚するようにもなった。自分たちの子どもを政府の学校に入れ、法を遵守するようになった。」[60]

しかし、一見すると従順になったように見えたが、クルド人はまだ共和国に対してやや反抗的だった。共和人民党（CHP）の活動にあまり参加しようとしなかったのがそれを示している。１９３８年には、CHPはユーフラテス川の東側、アララット、ビンギョル、ビトリス、ディヤルバクル、エラズー、ハッキャーリ、マルディン、ムシュ、シイルト、ヴァン、トゥンジェリ、ウルファ以外の県には支部を持っていた[61]。トルコを統治する政党は、クルド人が多数を占める県では作られなかった。クルド人は従順にはなったが、積極的に共和国に参加することはなかった。

この反乱の鎮圧以降、「クルド人」や「クルディスタン」と言う言葉がトルコの辞書、歴史書などから抹消され、これらの言葉を口にすることすらタブーとなったとされている[62]。

---

60 *ibid.*, pp.112-113.
61 *ibid.*, p.113.
62 中川喜与志（前掲）、２１３頁。

第三章　PKK

第一節　PKK の闘争

デルスィムの抵抗以降続いていた静寂は、クルディスタン労働者党（PKK）　の出現によって破られた。

この組織は１９７４年、アブドゥッラー・オジャランがマルクス・レーニン主義に傾倒する若い左翼活動家を集めたことから始まった[63]。この集まりが４年後に発足することになるＰＫＫの土台となった。

オジャランは支持者から「アポ」と呼ばれ、彼の支持者たちは「アポジュ」と呼ばれるようになった。１９７８年の暮れ、オジャランとその仲間は、クルド地域の中心都市ディヤルバクルで正式にＰＫＫを設立した[64]。

ＰＫＫの基本計画として採用されたのは、「クルド革命の道」である。労働者、小作農と青年知識人による連帯によって、封建的搾取構造がまかり通るクルド地域の革命を起こすことがＰＫＫの第一段階の目標となり、その上でクルディスタンに非同盟の独立国家を樹立し、最終的にマルクス・レーニン主義を基盤とする国家機構を構築するというものであった[65]。この「クルド革命の道」が、その後のＰＫＫの武力闘争の基本となった。

１９８４年８月、PKKは「クルド独立のためのゲリラ闘争」を開始した。シイルト県のエルフ、ハッキャーリ県のシェムディンリの軍の施設を攻撃したことから、「エルフとシェムディンリの奇襲」と呼ばれる[66]。これ以降ＰＫＫは各地でゲリラ活動を展開する。

PKKは１９８０年代末には、「一握りのテロリスト集団」ではなくなっていた。９０年代には、東トルコで熱狂的な支持を受ける存在となった。ゲリラ志願者が急増し、その受け入れに四苦八苦する事態まで生んだ。PKKと戦う民兵（キョイコルジュラル）としてトルコ政府に組織されたクルド人部族、武装闘争を否定するクルド人政治組織もいくつか存在していたが、PKKがトルコのクルド人を代表する政治勢力となっていたことは確かだった[67]。

しかし、その支持はテロリスト的な活動よりも、合法的活動によるところが大きかった。

63　勝又郁子『クルド・国なき民族のいま』（新評論、２００１年）、１８７頁。
64　同上。
65　同上、１８８頁。
66　中川喜与志（前掲）、２２６－２２７頁。
67　同上、２３４頁。

クルド人アイデンティティを掲げる合法政党が結成され、トルコ議会に乗り込んだ。それまではタブーとされてきたクルド人問題を持ち込み、独自民族としての認知、民族的権利の保障を公然と要求するようになった。政府は新しい政党に対して閉鎖命令を出していたが、クルド人たちは次々と後継政党を作っていった。また新聞も次々と発行され、これも閉鎖命令と後継紙の刊行が繰り返された[68]。

このような合法活動が、それまで PKK の武装闘争を懐疑的に見ていたクルド人の知識人層や政治家たち、都市部のクルド系住民、学生などがクルド民族運動に流れ込んでくるきっかけとなったのである。

こうした動きに対して、トゥルグット・オザル大統領が９１年に「クルド語の部分解禁」に踏み切るなど、問題の政治的解決を探る動きを見せている。しかし、政治的解決の動きは、オザル大統領の突然の死によって中断してしまった[69]。

また実際には、農村部でPKKを支持していると判断された村や町からクルド住民を追放し、村や町そのものを破壊すると言う、いわゆる「無人化政策」が行われるなど、９０年代を通してのトルコのクルド人政策は、徹底した力による押さえ込みだった[70]。

１９９３年の春、PKKはトルコ政府に対して一方的停戦宣言を行い、これによって約一ヶ月の停戦が実現した。しかし、今でも真相が分かっていないオザル大統領の突然の死と、それに続くPKK内の停戦反対派による戦闘再開で、停戦は終わってしまう[71]。９５年秋、PKKは再び一方停戦宣言を出すが、トルコ軍部及び政府は「テロリストとの対話はありえない」として、掃討作戦を続けた。９８年秋、PKKは三度目の一方停戦を宣言するが、それでも停戦は実現しなかった。

第二節　オジャランの逮捕

１９９８年まで、オジャランはシリアに匿われていた。すでにトルコは、PKKの本部がシリアのコントロール下にあるベカー高原にあることも、シリアの首都ダマスカスにオジャランの住居があることも確認していた[72]。PKKが３度目の一方的停戦宣言を行った翌月の９８年１０月、トルコ政府はシリア国境に軍を集結させ、シリア政府に対してオジャラ

68　中川喜与志（前掲）、２３４－２３５頁。
69　同上、２３６頁。
70　同上、２３６頁。
71　同上、２３８頁。
72　勝又郁子（前掲）、２３２頁。

ンの引渡しを要求した。シリア政府は引渡しには応じなかったものの、オジャランをシリアから出国させた[73]。

シリアを出国したオジャランの存在が最初に確認されたのはロシアだった。ロシアの議会は、オジャランの政治亡命を認める勧告を満場一致で採択した。いったんは住居が確認されたがオジャランはまた姿を消し、次にオジャランが現れたのはイタリアだった。イタリア当局はオジャランを逮捕し、その後は通常の住居を与えて監視下に置いた。トルコ政府はオジャランの引渡しを要求したが、イタリアの裁判所は「死刑判決の可能性がある国への送還はできない」と言う判断を下した[74]。イタリアを出国する１９９９年１月１６日まで、オジャランは比較的自由な生活が許されていた。しかし、２月１５日、オジャランはケニアのナイロビで逮捕され、トルコに強制送還された[75]。

オジャランはその後、国家反逆罪で死刑判決を受け、マルマラ海のイムラル島の刑務所に収監された[76]。しかし、トルコはEU加盟条件を満たすために２００２年に死刑制度を廃止したため、併せてオジャランを終身刑に減刑した[77]。

この裁判の過程で、オジャランは９９年９月に、獄中からPKKゲリラに武装闘争の放棄とゲリラ部隊のトルコ領土からの退去を指示した[78]。PKK指導部はこの指示に従い、９９年末にはゲリラ部隊を撤退させた。オジャランは、トルコ共和国の領土保全を認めたうえで、独立要求のスローガンを放棄することを改めて明言し、代わりに次のような要求を出した：[79]

- トルコ軍によるクルド人の村への攻撃の停止
- 強制退去させられたクルド難民を、彼らの村へ帰すこと。
- 「キョイコルジュラル」制度の廃止
- トルコ国内のクルド人区域の自治
- クルド人の民主的権利の承認

73　中川喜与志（前掲）、２４０頁。
74　勝又郁子（前掲）、２３３頁。
75　同上、２３４頁。
76　中川喜与志（前掲）、２４１頁。
77　http://homepage.mac.com/postx/iblog/B1224504573/C1169684793/E1097784897/index.html
78　中川喜与志（前掲）、２４１頁。
79　http://www.xs4all.nl/~kicadam/pers/oud/propose.html

・　クルド人のアイデンティティ、言語、文化の公式認定
・　宗教の自由と社会的多元性の承認

　またオジャランは、２００６年９月、彼の弁護士イブラヒム・ビルメズを通して、PKKに停戦を誓い、トルコと共に平和を追求していくように声明を出した。オジャランの声明は、「PKKは自らが攻撃されない限り、武器を取ってはいけない」そして「トルコ人とクルド人の間で、民主的共同体が作られることが重要である。その過程の中で、民主的な対話への道も開かれる」と述べている[80]。このオジャランの呼びかけにより、問題の平和的解決への道が開かれることが期待されている。

[80] http://en.wikipedia.org/wiki/Abdullah_%C3%96calan

おわりに

トルコにおいて、クルド人は長い間厳しい同化政策を受け、迫害されてきた。しかし近年、主に EU 加盟問題によって状況は好転しつつある。

１９９１年までクルド語の使用は禁止されていた。現在は限定的ではあるものの、クルド語のテレビやラジオの放送も認められ、私立校でのクルド語教育も許可されている。

上記のオジャランの声明を見ても、長きに渡るトルコ人とクルド人の戦いも、一応の終結を迎えたといっていいだろう。

しかしまだ改善は始まったばかりであり、状況は常に変わり続けている。今後も、トルコ人とクルド人がどのように変化していくかを見ていきたい。

参考文献

Soner Cagaptay *Islam, Secularism, and Nationalism in Modern Turkey: Who is a Turk?* Routledge 2006

中川喜与志『クルド人とクルディスタン』南方新社　２００１年

勝又郁子『クルド・国なき民族のいま』新評論　２００１年

粕谷元「トルコ共和国成立期の「国民」（millet）概念に関する一考察」　酒井啓子編『民族主義とイスラーム』アジア経済研究所　２００１年

ウェブサイト

Wikipedia　http://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page

クルド人問題研究　http://www1.odn.ne.jp/~cbq97680/index.htm